慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 近代の再考と社会（科）学の行方：ギデンズのモダニティ論をめぐって |
| Sub Title | Rethinking modernity, or search for sociology : situating Giddens' analysis of modernity |
| Author | 門田, 健一(Kadota, Kenichi) |
| Publisher | 慶應義塾大学大学院社会学研究科 |
| Publication year | 2000 |
| Jtitle | 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.51 (2000. ) ,p.7- 14 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 論文 |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000051-0007 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 近代の再考と社会（科）学の行方

## ——ギデンズのモダニティ論をめぐって——

# Rethinking Modernity, or Search for Sociology

## —Situating Giddens' analysis of Modernity—

門　田　健　一*
*Kenichi Kadota*

This paper attempts to search for the discourse on modernity after the enthusiastic debate on whether our time is modern or postmodern, and at the same time, to have a clue of rethinking social sciences, including sociology. Giddens, who is one of the main sociologists who regard modernity as the main issue of contemporary sociology, says that with the advent of globalization today, it is indispensable for sociology to rethink not only of modernity but also of the categories of sociology for analyzing modernity. The main purpose of this paper is to examine the Harbermas' methodology of criticizing modernity and the Lyotard's approach to postmodernity in the light of the works of Giddens. Harbermas' critical theory assumes the distinction between laypersons and social scientists, and so he argues modernity in terms of the outside of modernity. On the other hand, Lyotard's methodology reflects the locality and uncertainty of modernity, which enables him to criticize the ideology of 'meta-narratives'. But, his criticism is too linguistic to be applied to social sciences. Giddens' analysis of modernity, and 'reflexive modernization', seek to confront the debate between modernists such as Harbermas and postmodernists such as Lyotard, and to overcome the limits on both sides.

### 1.

1986年にケンブリッジ大学で行われた教授就任演説の際，ギデンズは「社会学者とは何をしている人か？(What do sociologists do?)」と題された資料を配付している。『社会の構成』(Giddens, 1984) そして『国民国家と暴力』(Giddens, 1985) で，構造化理論の定式化を一応の形で終えたギデンズが，近代の分析へと本格的に精力を傾け始める時期に行われたこの講演では，転換期を迎えた社会学の起源が探られるとともに，危機感と希望をあわせもちながら社会学の展望が語られている (Giddens, 1987: 1-21＝1998: 11-35)。

それによると，社会学の起源は，西欧で始まった「伝統的世界の解体と近代の強化」に，具体的にいえば，産業主義の到来，都市への人口流入，大衆民主主義の進展などに代表される制度の激変にあるという。しかし，この変化は直線的に進行したわけではなく，操縦不能なジャガノートのように，方向を定めることなく不規則的に進行していくものであった。ギデンズは，生誕期の社会学の使命は，この不均等な変容の軌跡を跡づけることにあったという。

ところが，20世紀を迎え，近代は真の意味で「世界史的」となり，もはや地球上のどこにいようとも，その影響から逃れることが不可能になった。伝統的世界と近代的世界との対比ではなく，「相互依存性を高めるグローバルシステム」に，社会学をはじめとする社会科学は直面し始めている。21世紀を目前にした今日，この傾向は加速度的に強まり，「近代の最初の側面で起こったのと同じような社会の劇的変化」をわれわれは経験しているのである。

にもかかわらず，社会学は生誕期のコンテクストにあまりにも強く刻印されてしまっているという。社会が猛

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程
（理論社会学）

烈な速度で変化を遂げているにもかかわらず，依然として，生誕期の使命を引きずり続けている社会学。この講演を行った時期のギデンズには，激変する社会のあり様に対応しきれずに説明能力を失っていく社会学を，どのように立て直していくべきか，という問題が焦眉の課題として映っていたのであろう[1]。

このように，ギデンズは，近代の分析へと向かうまさにそのときに，社会学への深い危機感を表明しているのである。そうだとするなら，社会学への希望を語るギデンズにとって，真に世界史的となった近代を分析するという課題は，同時に，社会学の新たな学問像を探求し，そこから，社会学と現実世界との新たな関係を築きあげ，危機に陥った社会学を救済する，という課題でもあったと言いうる。換言するならば，ギデンズにとって，近代をいかに理解するかという問題は，社会学の課題の一つではなく，社会学の学問的再構成そのものに関わってくる問題なのである。

> 社会学と近代の諸制度との関連性は，長きにわたって，認識されてきた。しかし，今日，われわれの理解によれば，こうした関連性がこれまで認識されてきた以上に複雑で問題含みなものとなるだけでなく，近代の本質の再考が，社会学的分析の基本前提の再構築とともに，要求されてもいるのだ。(Giddens, 1991: 1)

近代を主題として取り上げた主著『近代と自己アイデンティティ』の冒頭のこの一節は，ギデンズが近代論へと取り組むにあたってのスタンスを明確に示している。

そして，近代の再考と社会学の再構成という二重の課題を具体的に果たそうとするとき，ギデンズはその所論を「ポストモダン」論に対抗しつつ展開している。近代を初めて主題にすえた『近代の諸帰結』の冒頭におかれた次の言明は，ギデンズの問題意識の所在を如実に表している。

> 社会組織について体系的認識を得ることができないという感情のなかに表出する方向感覚の喪失は，自分たちには完全に理解できない，大部分統制が不可能に思える事象世界のなかに自分たちが巻き込まれているという，われわれの多くがいだく意識に主に起因している，と私は主張したい。なぜそうなったのかを分析するためには，ただポストモダニティ等の新語を創作するだけでは不十分である。(Giddens, 1990: 2-3＝1993: 15)

一口にポストモダン論といっても，それに当てはまる議論の外延を測定するのは困難な作業ではあるが，しかし，ギデンズの想定しているポストモダン論とギデンズ自身との間には，問題意識を共有しつつも，決定的な違いが存在している。つまり，ポストモダンの議論は「大部分統制が不可能に思える事象世界のなかに自分たちが巻き込まれているという，われわれの多くがいだく意識」を反復しているだけにすぎないのに対して，ギデンズにとって重要なのは，なぜ統制不可能に思える事象世界が生起したのかを解明することにある。この違いは，ポストモダンの代表的な論者であるリオタールの科学方法論を鑑みるとき，いっそう際立ったものとなってくる。しかし他方で，ギデンズは，ポストモダン論者の論争相手と目されているハーバーマスにも与しない。ギデンズとハーバーマスの齟齬も，まさに，社会科学のあり方をめぐるものである。

本稿では，以上のような問題意識のもと，ポストモダン－モダン論争以後という文脈にギデンズの近代分析をおいてみたときに，その立場がどのような意義をもちうるのかを明らかにしてきたいと考えている。まずは，ギデンズとハーバーマスの近代に対するスタンスの違いを，両者の「抽象的システム」の位置づけの相違を通して明らかにする（第 2 節）。次に，ポストモダン論者の典型としてリオタールを取り上げ，リオタールとギデンズの科学方法論の相違について検討をし（第 3 節），最後に，社会（科）学についての若干の展望を記したい。

## 2.

ギデンズが社会（科）学の危機を唱えるとき，社会科学の学問諸領域の再構成の必要性――たとえば，社会学と地理学，社会学と歴史学などの関係性や，ミクロ－マクロ問題など (Giddens, 1984)――を考えていることは確かではあるが，しかし，それよりも重要なのは，社会学と日常的世界との関係性の変化がもたらす危機である。そこには，社会科学的世界内部の構成変化だけでは乗り越えていけない問題群が現れてきている。

この問題をめぐって，近代を同じく論じているハーバーマスとギデンズの間には，鋭い対照が見られる。ハーバーマスの近代理解は，周知のように，近代化のプロセスを抽象的システムによる「生活世界」の植民地化と呼び，対話的合理性にそこからの解放の可能性を読みとるという構成をとっている。近代をこのように理解す

ることによって，ハーバーマスが構想する批判理論にとっては「社会の近代化が，経済成長や国家による組織的活動（行政や福祉）のもつ強制力に促されて，自然に生い育った生活形式への生態系に闖入してくることへの，つまり，歴史的な生活世界のもつ対話的な内部構造を浸食することへの」批判こそが，その要諦となる(Habermas, 1981＝1999: 19–20)。

近代社会に浸透する抽象的システムの抑圧的な力を指摘し，それへの批判の足場を築こうとするハーバーマスの試み自体は，確かに評価できるのだが，しかし，問題は，その批判の方法である。「植民地化」や「浸食」という言葉に端的に表れているように，抽象的システムに否定的な意味だけを読み込んだうえで，抽象的システムと「生活世界」との関係を理論化するハーバーマス的な批判の方向を，ギデンズは受け入れない。

> 理由は二つある。ひとつには，たとえ近代制度が根づいても基底にあるものはまったく以前のものと変わらないような，そうした「生活世界」のなかに近代制度は根を下ろしていくわけではないからである。日々の生活に生じた変質は，弁証法的相互作用によって，脱埋め込みメカニズムにも影響をおよぼしていく。二つ目の理由は，一般の行為者が，抽象的システムとのルーティン化した取引の一部として，専門技術的知識を継続的に再専有していくからである。(Giddens, 1990: 144＝1993: 179)

ギデンズに倣えば，「生活世界」は静態的な本質として実体化されるべきものではない。仮に「生活世界」の全体性をハーバーマスにならって認めるにしても，「生活世界」は，抽象的システムをその契機としながら，それ自体がたえず自己組織化をおこなっていく歴史的な運動体のごときものであって，スタティックな規範としてアプリオリに前提することはできない。「生活世界」と脱埋め込み＝抽象的システムとのあいだに弁証法的相互作用が存在しているとギデンズが述べるとき，念頭におかれているのは，そのどちらもが同時に変容を遂げていくということであって，どちらか一方が他方を「植民地化」するだけの関係ではない。

よく知られているように，脱埋め込みシステムとは，貨幣に代表される象徴的通標 (symbolic token) と，専門家知識に代表される専門家システム (expert system) に類型化され，それが抽象的システムと言い換えられる。脱埋め込みが抽象的システムと等置されるのは，象徴的通標にしろ専門家システムにしろ，信頼の対象となっているのが，個々の事物や個人ではなく，それが担っている抽象的な能力，すなわち機能性，汎用性，互換性であるからだ (Giddens, 1990: 26＝1993: 41)。近代世界は，この意味の抽象的システムに徹底的に浸透されており，もはや誰一人として，抽象的システムから逃れることができない。

さらに，「自然に生い育った生活形式」への抽象的システムの侵入という言い回しは，日常生活が抽象的システムにただ一方的に従属するものにすぎないということを暗示してもいるが，この点についても，「再専有 (reappropriation)」＝「再熟練化 (reskilling)」という側面を提起して，批判を加えている。

> 日々の生活の変質は，脱埋め込みメカニズムの衝撃という観点から，直接的に理解できる。というのも，脱埋め込みメカニズムは，日常的活動の多くの側面を脱熟練化 (deskill) するからだ。こうした脱熟練化というプロセスにおいては，日常の知識が専門家や技術専門家によって専有されるだけではない。……それは，一方向的なプロセスにすぎないものではない。というのも，専門的な情報は，近代の再帰性の一部として，何らかのかたちで，一般の行為者によってたえず再専有されるからだ。(Giddens, 1991: 22)

われわれは，日常生活の多くの場面で，生活上の知識を専門家システムに委ねざるをえない。たとえば，今日，電灯をつける際にその電力の供給がどこからなされているかについて，あるいは専門技術的な意味で電気とはいったい何かについて詳しく知っている人は，おそらく，ほとんど存在しないであろう。このように，近代世界においては，生活環境の変化は，前近代的な（局域的な生活環境の要求に対応するという意味で）「ローカルな知識」から専門家知識――汎用性，互換性をそなえるという意味で，その本性上，グローバルかつユニバーサルな知識――への，日常の知識の形態変化をともなうものであった。このプロセスは，見かけ上，生活するための技能が失われていく (de＋skill) かのようにうつる。こうした喪失を過度に強調するのなら，ハーバーマスのように，「植民地化」という語彙によって表現できないこともない。

しかし，ギデンズに従えば，脱熟練化のプロセスは，同時に，日常生活についての新たな知識を獲得すること

で「再熟練化」していく「フィルター・バック」(Giddens, 1990: 145＝1993: 180) のプロセスでもある。つまり，われわれは生活の中で，スキルの解体と再構築を繰り返すのであるが，まさにそうした構築-脱構築の同時的なプロセスから，専門家知識も逃れることはできず，専門家知識とてたえず選別され濾過されていくのである。

専門家知識の絶えざるヴァージョン・アップは，専門分化の高度化と相まって，日常の行為者が，自らの生活環境について，すべての知識を習得することを不可能なものにする。

> 専門化は，近代の抽象的システムの重大な特徴である。近代的な形式の専門家知識に組み込まれていく知識は，原理的に，すべての者にとって利用可能なものである。それを獲得するための資源・時間・エネルギーを手に入れることさえできればいいのである。ところが実際には，モダンの知識システムのなかのごくわずかな領域でしか専門家になることはできない。これはつまり，抽象的システムが大多数の者にとって，不透明であるということだ。(Giddens, 1991: 30)

われわれは，もはや誰一人として，完璧なる専門家として日常の生活を送ることはできない。これは言いかえれば，全知全能の立場から日常世界を俯瞰的に見るような位置に自らを置くことができる者が——少なくとも，日常行為者としては——全く存在しないということに他ならない。日常生活を送るという点では，すべての者が「ありふれた人物 (lay person)」(Giddens, 1990: 146＝1993: 181) であり，抽象的システムに対する不透明性を抱きつつも，それと対峙することから逃れることができないのである。

近代の日常性が帯びざるをえないこのような両義性は，近代における「信頼」の位置価を変容させる。つまり，ギデンズによれば，近代においては，抽象的システムへの信頼こそ日常生活を営む不可欠の要素となる。

> 信頼が前提とするのは，コミットメントへの跳躍，つまり還元不可能な「信仰 faith」という特性である。信頼は，無知だけでなく，時間と空間における不在とも，明確に関係づけられる。……専門家システムとの関係で言えば，信頼は，生活にルーティン的に影響を及ぼしているコード化された情報について，限定された技術知識しか持てないことを括弧入れしてくれるのだ。……だが，信頼の付与は，意識的に下された決定の所産とは限らない。信頼の付与とは，精神の一般的態度であって，そうした決定の陰に潜んでいる。(Giddens, 1991: 19)

たとえば，「なぜわれわれは近代社会に生きているのか」という問いに論理的解答を付与することは不可能であるが，それと全く同じ理由で，なぜ抽象的システムに信頼を寄せているのかという問いに対しても，論理をもって答えることはできない。われわれは，近代世界に生きている以上，抽象的システムのなかに，たえず投げ出されてしまっている。そして，そうした抽象的システムへの信頼は，認知的理解をこえたコミットメントであり，近代社会にいきる者すべてが不可避的にもたざるを得ない「信仰」である(2)。裏を返せば，この意味での信仰の放棄は，近代世界の外部に位置するということを意味する。

ギデンズがハーバーマスを批判するもっとも大きな理由は，おそらく，ハーバーマスの理論が，抽象的システムへのこうした信仰の放棄を前提としてもってしまっており，そのために近代の外部にたちながら近代を論じてしまっているという点にあるのだろう(3)。ハーバーマスがこうした陥穽におちいってしまったのは，「生活世界」という規範を自らの批判理論の準拠点として守ろうとするあまり，日常行為者として近代を生きてしまっていることが完全に捨象されてしまっているためであると言える(4)。ハーバーマスの理論が抱え込んでいるアプリオリは，社会科学としての（ハーバーマス流の規範的な批判）理論と，日常生活者としての実践との全き分離であるが，こうした分離の不可能性こそ，ギデンズの近代論（そして，言うまでもなく構造化理論）の基軸である。

## 3.

それでは，近代社会において日常行為者が直面する不透明性は，ハーバーマスの論争相手であったポストモダン論の知見と，どのような関係にあるのか。そもそも，ポストモダン論を切り開いたとされるリオタールは，「ポストモダン」という言葉によって何をとらえていたのか。このことがまずは確認されなければならないであろう。それは，社会（科）学におけるポストモダン現象への取り組みが，他のディシプリンと比較したときに極端に遅れをとっていた（いる？）ことを考慮すれば，ゆるがせにできない問題でもある。むろん，ボードリャールのように，社会的なるものを，シミュラークルとして

とらえることによって，社会的なるものの消失を主張するような極端なポストモダン論は，本来的に社会（科）学において受容されるはずもないだろうが，しかし，高度に複雑化した現代社会を前にしたときに，社会的なるものの自明性への疑義を唱えたことは，「社会」を問うことを使命とする社会（科）学に内在する無意識への問いかけでもあったはずである。

「ポストモダン」という現象を表現しようとする諸概念――ポストモダニズム，ポストモダニティなど――が生まれてきた歴史的要因としては，さまざまなものが考えられるが，その中でもすぐに思い浮かぶのは，ポスト産業主義として論じられた経済システムの変化である。この点でもっとも影響力が強かったのは，もちろん，ベルのポスト産業社会論であったのだが，彼によれば，資本主義社会は，旧来の産業主義的下部構造を脱却し，ポストフォーディズム生産への移行，新たな専門知識階級の登場，イノベーションや政策決定の源泉として理論的知識の重要性の増大，組織理論・情報理論の高まりなどの大きな変化に直面していた (Bell, 1974)。

こうしたポスト産業主義の分析をうけて，消費主義の問題が現れてきた。ラッシュとアーリーによれば，第三世界における産業化の進展の結果，西欧において工業生産が衰退し始めたと同時に，西欧の文化的生活の断片化が進行したという。こうした傾向は，商品の消費記号価値に基づいた高度に専門化した商品市場をもたらした。記号価値のこのような氾濫は，固定化された主体性を揺らがし，主体は脱中心化される。さらに，テレビなどのマス・メディアの発達は，階級，ジェンダー，年齢といった伝統的な集合アイデンティティを強めている象徴体系を弱体化させ，この傾向を強めるという (Lash and Urry, 1987; 1993)。

ポスト産業主義，消費主義をめぐるこうした分析は，資本主義経済および社会変動が，主として生産力によって条件づけられているというマルクス主義の発想では理解し得ないものとなったという議論を導いた。交換や，記号価値からなる象徴世界が，機械や物質といった「現実の」世界よりも重要であるとみなされるに至ったのである。こうした生産パラダイムの衰退が背景となって，現実界＝物質的世界と，象徴界＝表象の世界との区別をうち崩そうとするポストモダン論者の試みが現れたのである[5]。

以上のような，ごく粗雑な描写をふまえるだけでも，強調点は異なるとはいえ，ギデンズが，再帰性の徹底化，抽象的システムの複雑化によって述べようとした日常生活の不安定性や不透明性の増大が，ポストモダン論の背景となった上記のような事態に関わっていることがおそらく間違いがないことに気づくだろう。そして，これはまた，ポストモダン論者の「大きな物語」の失墜という議論の現実的根拠にもなっている (Lyon, 1994＝1996: 116-117) 事態であるとも言える。

かつて知識人と呼ばれた人びとは，自らの知の全体性を追い求め，社会を解き明かす包括的な議論の構築を目指した。ところが，もはや知識の全体性を保証する基盤が，現実の生活のなかから失われてしまったことが明らかになった以上，すべてを包括する還元論的な「物語」を構築し，それを（社会）科学の理論だと称したところで，猜疑の眼差しを向けられることになるほかない。

このように考えるなら，リオタールが，1979年の『ポストモダンの条件』のなかで，早くも，「大きな物語」に対する不信の念を表明したことには，確かに先行性が存在していたと言ってよい。しかし，この主張は，ポストモダンという新しい時代に突入したことの象徴として理解されるべきものではない。モダン－ポストモダンという二項対立的な図式に絡め取られることなくリオタールの著作を注意深く読んでみると，実は，リオタールの中には，ポストモダンの段階を，それ以前の歴史的段階から根本的に区別された全く新たな段階だとは理解していない，という側面があることに気づく（というよりも，そもそもこうした歴史的段階の全面的な移行を否定したのが，リオタールの議論であったはずだ）。このことは，「大きな物語」の失墜後もなお，物語そのものが放棄されることはなく，「新たな重要な研究領域であることを越えて，人間精神の中心的位置にあり，そして抽象的思考と全く同じく正統的な思考様式」(Jameson, 1984: xi) であると位置づけられていることからも看取できるであろう。したがって，ここで問題なのは，あくまでも，物語の相対的規模であって，物語そのものの放棄ではない。近代のダイナミズムがその加速力を高めてきた1960年代から1970年代にかけて，不透明性を増した抽象的システムを前にした日常行為者の不確実性や不安定性が，知の領域においても無視することが不可能になるまでに高まっていったことを背景に，全体性を標榜する「大きな物語」はそのリアリティを失っていき，ローカルな場面での「小さな物語」へと分解していくだけなのだ。

こうした知の不確実性・局所性・一時性に対するギデンズの認識は，再帰性概念の彫琢を通して提示されている。再帰性は，元来，社会生活の反復性を概念化したものであるから，その適用は近代社会に限定されるもので

はない。ギデンズは，前近代社会において社会の反復性を維持していたもっとも大きな要因が伝統である，という。伝統は，それが伝承されてきたという理由だけで是認されてきたものであり，「経験を末代に伝えるもの」として尊重されてきた。したがって，前近代社会の再帰性は，「伝統の再解釈と明確化」(Giddens, 1990: 37＝1993: 54) だけに制限されるものであった。

ところが，近代社会の到来とともに，再帰性はその本質を変える。近代の再帰性は「システム再生産の基盤」に浸透し，それによって思考と行為は相互反照性をもつようになる。つまり「社会的実践がまさにその実践に関しての新たな情報に照らしてたえず検討・変革され，その結果として，社会的実践の特質をその構成から変えてしまう」(Giddens, 1990: 38＝1993: 55) のである。この近代の再帰性の方法原理となっているのが，懐疑の精神である。

> 懐疑は，近代の批判的理性の全面的な特徴であり，哲学的意にはもちろん，日常生活にも浸透している。そして，懐疑は，現代の社会的世界における実存の一般的次元を形成してもいる。近代は，ラディカルな懐疑という原理を制度化し，すべての知は仮説の形を取るのだ。(Giddens, 1991: 3)

したがって，近代社会においては，科学という限定された領域にしろ，日常生活全般にしろ，知識を確信性と同一視することはできない。というのも，われわれが生きる近代世界は，そのすべての領域が「再帰的に適用された知識」(Giddens, 1990: 39＝1993: 56–57) によって構成されているからである。近代世界は，このように，確実な知識を用いて一つの方向性にしたがって動いていく世界ではなく，現在の方向性にたえず，懐疑の眼差しが向けられることになる。そのために，必然的に，方向感覚の喪失をともなった世界とならざるをえない。

そもそも，近代の社会システムを思想的に準備した啓蒙思想運動においても，こうした方向感覚の喪失は，その端緒から存在していたとギデンズは言う。ドグマという足かせから自由になった理性による懐疑が，理性そのものに向けられたとき，理性はその確実性を失うことになる。つまり「理性によって得た既知の事実は，知の主張に完全に確実な基盤をもたらすこと」はできないことが明らかになったのである。というのも，「理性による観察には理論的断定が浸透していることが今日ますます認識されてきた」(Giddens, 1990: 49＝1993: 68) からである。

ニーチェによって切り開かれたとされる，こうした「基礎づけ主義 (foundationalism)」の放棄＝ニヒリズムが，19 世紀末以降の哲学思想にとって重要性をもっていたことを否定することはできないであろう。とはいえ，「基礎づけ主義」の放棄は，近代の衰退や消滅を意味しているのではない。それは，懐疑の原理にのっとった近代の理性がもつ循環性を承認するということであって，言い換えるなら，近代の運動原理である再帰性についての＜理解＞をもたらすものなのである。

以上のような，ギデンズの再帰性論は，近代の社会科学的知が帯びざるをえなかった負荷を示している。いわゆる「大きな物語」は，社会の一つの制度——経済であれ，テクノロジーであれ，はたまた思想であれ——に，諸制度の複合的な変動を還元することによって，実のところ，啓蒙思想に導かれた近代的知の不確実性と不安定性を覆い隠すというイデオロギー的効果をもっていたのである。そして，ポストモダン論は，「大きな物語」のもつこうした隠蔽効果を暴きたて，抽象的システムという不透明性に直面する日常行為者の意識と通底しあう要素を備えていた——その点で，学問領域にある種の開放感をもたらしはした[6]——と，歴史的に位置づけることができよう。しかし，上でも触れたように，そのベクトルは，日常行為者がそうした意識を持つにいたったことを解き明かす社会分析には向けられておらず，結果としてもたらされたのは，哲学的ないし言語論的混乱だけだったのだ。

しかし，こうした混乱は，リオタールが方法論として，非表象的な認識論を求め，オースティンの言語行為論に倣った「遂行性」を標榜していた以上，むしろ意図的でさえあったと言えるであろう。確かに，ギデンズも述べるように，近代の社会科学は「二重の解釈学」という構図をもち，対象に対して客観的な態度を維持することはもはや不可能である。その意味において「遂行的」であると言えなくはない。しかし重要なのは，そこから「社会的なるもの」の失墜を叫んで哲学上の言葉遊びに耽溺することなく，今一度，客体としての社会へとアプローチしていく回路を構築していくことだったのではないか[7]。

## 4.

ギデンズが近代を論じる方法は，ハーバーマスのように，生活世界という概念を旋回軸にしながら，抽象的システムに否定的な意味だけを読み込む規範的な立場でも

なければ，ポストモダン論のように，抽象的システムがもたらす不透明性の徴候の一つを演じる言語行為論的な立場でもない。抽象的システムというジャガノートを乗りこなすことを余儀なくされているわれわれにとって，「生活世界」という理念型から抽象的システムを一方的に批判するという立場はあまりにもナイーブだといわざるをえないし，また，抽象的システムが強いる断片性を遂行するだけの立場はあまりにも無力だといわざるをえない。

完全に制御されることのない抽象的システムとの取引を，われわれは，いかに遂行していくのか。そして，そのための社会（科）学とはどのようなものか。ギデンズの近代論は，これらの問いを真正面から受け止めたものとして，何よりもまず理解されるべきだ。もちろん，こうした問いに対する解答は一義的なものではありえないし，またわれわれ自身が受け止めていかねばならない問いでもある。

そのためには，今一度，近代とはいかなる時代であるのか，そしてポストモダンと称されていた現象がいかなる現象であったのかを――ギデンズすら相対化しつつ――思考していく必要があるだろう。というのも，社会（科）学が，本質的に近代とともにしかあり得ない学問だとするならば，近代の理解は，社会学の自己理解でもあり，したがって，近代の理解の深度に応じて，学としての社会学もその深度をすすめることになるからである。ギデンズの試みはもちろん，ギデンズもその一論者として含みつつ大きな展開を見せている再帰的近代化論は，これらの問いに積極的に挑戦しようとした理論潮流であると，何よりもまず位置づけられるべきだ。

最後に若干，この点について触れ，今後の展望としたい。かつて，マックス・ヴェーバーは近代化の過程を「分化 (differentiation)」の過程ととらえた。それによると，社会生活の諸領域が自立化へと向かい，それぞれに「固有法則性 (Eigengesetzlichkeit)」をもつにいたるという。言うまでもなく，「大きな物語」という還元論的な構図が成り立つには，こうした諸領域の自律性が前提となっていなければならない。

だとすれば，「ポスト近代化」の過程とは，スコット・ラッシュに倣い，「脱―分化 (de-differentiation)」の過程であると言えるだろう (Lash, 1990＝1997: 17)。そして，経済，政治，文化といった社会の諸領域の「固有法則性」の失効の顕在化が，まさに単一の領域に還元するという構図をとった社会（科）学を崩壊させたわけである。もちろん，こういったからといって，社会のそうした諸領域の差異が失われ，「社会」という単一の場に吸収・溶解されてしまうわけでも，社会科学の形姿が無形化すると言っているわけでもない。むしろ，この「脱―分化」という概念が言い表しているのは，たとえば，経済をただ経済として論じ，文化をただ文化として論じる，という学問の閉鎖性が不可能になったということ，さらに言うと，固有のディシプリンへの盲目的な執着が「脱―分化」の過程への無自覚を導き，結果として社会（科）学の不可能性を誘発しかねない，ということである。

このような閉鎖性を自覚的に突破しようとした試みに，デヴィット・ハーヴェイの近年の仕事を挙げることができるだろう。いまや古典となった感がある『ポストモダニティの条件』のなかでハーヴェイは，「政治－経済的過程と文化的過程との物質的連関」を示すために，「社会生活での空間と時間について説明」することによって「ポストモダニズムと，フォーディズムから資本蓄積のよりフレキシブルな様式への移行との連関を空間的，時間的経験という媒介を通して探求」(Harvey, 1989＝1999: 258) しようとしている。こうしたハーヴェイの試みを，手の込んだ経済決定論と評する向きもあるが，しかし，重要なことは，ハーヴェイが分析の範囲を絶えず外部へと拡張していき，従来の学問（ハーヴェイなら地理学ということになるだろうが）の閉鎖性を突破しうる媒介作用を意図的に試みているということではないだろうか。

おそらく，ギデンズの近代論，そして再帰的近代化論は，この延長線上に位置するものとして，社会学の脱構築と再構築を推し進める試み（の一つ）であると摂取していくことが重要であるように思われる。たとえば，ギデンズが性愛の問題を取り上げる一方で，新たな政治学の構築を目指しているのも，社会学の境界の解体―再画定にコミットしていることの現れとして理解されるべきだ。こうした視点でのギデンズ，そして再帰的近代化論を中心に近代論の諸相を検討することは，稿を改めて論じることにしたい。

## 【注】

(1) この講演と同年に行われた別の講演での原稿をもとに書き記された「社会学の将来についての九つのテーゼ」と題された論文の中でも，社会学へのギデンズのこうした危機意識は，いっそう鮮明に表明されている (Giddens, 1987: 22–51＝1998: 37–78)。

(2) 近代社会が必然的に帯びる，こうした宗教性の秘密を，商品分析として根底的に解明したのは，言うまでもなく，マルクスである。ここでギデンズが述べている信仰も，特定

の宗教形態を指してのものではなく，このマルクス的な意味での「日常生活の宗教」に言及するものでなければならない。なお，マルクスの「日常生活の宗教」への批判については，津田(1993)を参照。

(3) この点については，名部(1994)を参照。

(4) ハーバーマスが，「生活世界」のこうした特権化をおこなってしまうのはなぜかというと，抽象的システムに浸透されない「理想的な」空間が，どこかに存在するのではないか，という淡い期待が存在しているからだ。こうした空間がユートピアにすぎないことは言うまでもないだろう。とはいっても，批判理論がそもそも，そのユートピア性を逆手にとって，現実の矛盾を暴きだし，それに批判を加えていくものだとするならば，こうしたハーバーマスの立場は，批判理論の嫡子であることも，また確かである。そして，ハーバーマスのこうした傾向は，最初期の著書『イデオロギーとしての技術と科学』におけるテクノロジーの評価をめぐる議論のなかにすでに現れている。つまり，「日常生活の宗教」への無感覚は，テクノロジー理解からもたらされたものであり，それゆえ，ハーバーマスが陥っている批判理論の袋小路から抜け出すためには，テクノロジーの再検討が重要となってくるのだ。この点の検討は今後の課題としたい。

(5) もちろんここではそのことの是非を問うているのではない。

(6) ポストモダンという用語がもたらした解放性については，『大航海』「特集 ポストモダン再考」(1996, No. 10)に所収されている諸論が参考になる。

(7) むろん，哲学者たるリオタールに，こうしたことを求めるのは無謀なのかもしれない。

## 【主要参考文献】


Beck, U., Giddens, A., and Lash, S. 1994 *Reflexive Modernization,* Polity Press＝松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三訳 1997『再帰的近代化——近現代における政治，伝統，美的原理——』，而立書房。

Bell, D. 1984 *The Coming of Post-industrial Society: A Venture in Social Forecasting,* London: Heinemann.

Harvey, D. 1989 *The Condition of Postmodernity,* Oxford: Basil Blackwell＝吉原直樹訳 1999『ポストモダニティの条件』，青木書店。

Giddens, A. 1976 *New Rules of Sociological Method,* Hutchinson＝松尾精文・藤井達也・小幡正敏訳 1987『社会学の新しい方法規準——理解社会学の共感的批判——』，而立書房。

——. 1977 *Studies in Social and Political Theory,* Basic Books＝宮島喬他訳 1986『社会理論の現代像——デュルケム，ウェーバー，解釈学，エスノメソドロジー——』，みすず書房。

——. 1979 *Central Problems in Social Theory: Action, structure and contradiction in social analysis,* University of California Press＝友枝敏雄・今田高俊・森重雄訳『社会理論の最前線』，ハーベスト社。

——. 1981 *A Contemporary Critique of Historical Materialism, vol. 1, Poverty and the State,* Macmillan

——. 1984 *The Constitution of Society: Outline of the Theory of Structuation,* Polity Press

——. 1985 *The Nation-state and Violence, vol. 2 of A Contemporary Critique of Historical Materialism,* Polity Press＝松尾精文・小幡正敏訳 1999『国民国家と暴力』，而立書房。

——. 1987 *Social Theory and Modern Sociology,* Blackwell＝藤田弘夫監訳 1998『社会理論と現代社会学』，青木書店。

——. 1990 *The Consequences of Modernity,* Polity Press＝松尾精文・小幡正敏訳 1993『近代とはいかなる時代か？——モダニティの帰結——』，而立書房。

——. 1991 *Modernity and Self-identity,* Polity Press

——. 1992 *The Transformation of Intimacy,* Polity Press＝松尾精文・松川昭子訳 1995『親密性の変容——近代社会におけるセクシュアリティ，愛情，エロティシズム——』，而立書房。

——. 1994 *Beyond Left and Right,* Polity Press

Harbermas, J. 1968 *Technik und Wissenschaft als >Ideologie<,* Suhrkamp, Frankfurt am Main＝長谷川宏訳 1970『イデオロギーとしての技術と科学』，紀伊国屋書店。

——. 1981 "Die Moderne——ein unvollendetes Projekt", in Kleine politische Schriften I-IV, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main.＝三島憲一編訳 1999「近代 未完のプロジェクト」，『近代——未完のプロジェクト——』：3-45，岩波書店。

Jameson, F 1984 "Forward", in Lyotard, J. F. *The Postmodern Condition,* University of Minnesota Press.

Lash, S. 1990 *Sociology of Postmodernism,* Routledge.＝田中義久監訳 1997『ポスト・モダニティの社会学』，法政大学出版局。

——. 1993 "Reflexive Modernization: The Aesthetic Dimension", in Theory, Culture & Society, Sage, Vol. 10

Lash S. and Urry, J. 1987 *The End of Organized Capitalism,* Polity Press.

——. 1993 *Economies of Signs and Space,* Sage.

Lyon, David 1994 *Postmodernity,* Open University Press.＝合庭惇訳 1996『ポストモダニティ』，せりか書房。

Lyotard, Jean-Francois 1979 *La condition postmoderne,* Pars, Les éditionsde Minuit＝小林康夫訳 1986『ポストモダンの条件』，書肆風の薔薇

名部圭一 1994「アンソニー・ギデンズの近代社会論——近代としてのポストモダン——」，『ソシオロジ』第 119 号：83-100

津田雅夫 1993『マルクスの宗教批判』，柏書房。

その他 1996『大航海 特集：ポストモダン再考』，新書館。